The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂回顧座談會
Author(s)	
Citation	懐徳. 1953, 24, p. 60-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90265
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德堂回顧座談會

（昭和二十八年八月一日懷德堂書庫内に於て）

懷德堂は愈この十一月中に現在の場所を退轉することになつたので、八月一日堂友會員の集合を乞うて午後一時半から回顧座談會を催したが、豫定の時間をはるかに超えて四時半散會した。

出席者

堂友會側

井上正美　井口金次郎
晉代節雄　酒井全太郎
田頭義雄　千葉傳次
中川幸三　永原武夫
平田武藏　山本（紙上參加）楢信
吉田鈴子

懷德堂側

本間瀨理事（紙上參加）　岡野幹事
司會　藤塚書記

司會者　皆さん炎暑の折柄にも拘らず多數御出席下さいまして、ありがとうございます。

さて懷德堂が愈、この十一月中にどこかえ移轉しなければならんことになりましたので、堂友會の皆さんにお集りを願い、色々と思い出話をしていたゞきまして、それを今秋發行の「懷德」に載せて、聊か記念としたい、こういう次第であります、どうかよろしく。

尙今日は懷德堂建築中のそも〳〵から知つて居られる野口さんにぜひ出ていたゞいて、開堂當時の模樣をお話願いたいと思つたのですが、生憎臥床中で出席できないことは、まことに殘念ですが、開堂當時の模樣は、幸い吉田先生が、懷德十四號に書いておられますので、御覽願いたいと思います。

それでは先ず初めに岡野さんから、移轉しなければならなくなつた經緯についてお話願いまして、それからどなたからでもお話願いたいと思います。

岡野　懷德堂が愈、本年十一月末日を以て此處から移轉しなければならないことゝなりましたので、堂友各位に御集りを願ひ一同名殘りを惜しみたいと存じまして案

内を申上げましたところ、暑中御多用の中を御運び下され誠に有願く厚く御禮申上ます。尚、小倉理事長には只今東京に居られ、又木間瀬堂務理事には御病氣御引籠り中であり、本會事業運營委員の木村先生も亦御病氣で、御話し願ふ事が出來ないのは洵に淋しい限りであります。

御承知の通り當懷德堂は遠く享保の昔に初まり、大阪の町人學問所として當時幕府の昌平黌に拮抗する儒學者を出し、由緒の深い商都大阪の誇りであります。而して、明治維新に際し各地の藩學と共に一時廢止されたのでありますが、大正二年、住友先代男爵を初め當地多數有識各位の發起により復興を見、爾來財團法人懷德堂記念會として過去四十年間市民の教學、文化の向上に努め聊か道義の昂揚に寄與して參つたのであります。

然るに昭和二十年三月不幸戰災に遭ひまして、此の書庫のみを殘し私共が懷しい思出のあの講堂事務所が烏有に歸しましたが、襲藏中の書物と共に遺書遺物が燒失を免れましたことは不幸中の幸とでも申すべきでありませう。そこで翌二十一年四月事務所兼用の住宅を燒跡に新築しまして、藤塚君に居住して貰ふと共に一部の講義を續行したのであります。

しかし、從來の講義、講演を復興することは不可能となり自然大阪府市よりの助成金下附も停止せられ、加ふるに物價暴騰により未會有の貨幣價値の下落となり、社債、證券類の特別損失もありまして、會の運營維持に極度の困難を來したのであります。其間吉田教授の御死去あり、又永年無償貸與を受けて來ました借地料の納入を要する事となる等、出費の增嵩には全く進退兩難の窮狀となつたのであります。そこで役員會を開かれ種々御協議下さつたのですが、時節柄寄附募集も至難であり、結局戰災を免れた藏書全部を大阪大學に寄附し（この寄附の條件には本堂の爲一室を供與して頂くこと、藤塚書記を雇入して頂くことが附帶されてゐます）、現存の書庫と事務所とを處分して得た代價を以て基金の擴充を圖りまして、會の維持保存と出來るだけの事業を行ひ、時局下道義の昂揚に資したいとの念願達成に再スタートしようといふ事になつた譯であります。そうしてそれ等の事業の實施については顧問武内義雄博士を中心に新たに、大阪大學京都大學、大阪市大、關西大學の諸教授九氏に委員を委囑しましてその運營をして頂く事とし、現に記念祭典の執行、春秋二期講座開講、年刊誌「懷德」の刊行と國文學の講義を致して居るやうな現狀であります。尚書庫並に事務所の處分につきましては、お隣りの財團法人國際見本市會館との間に讓渡契約が出來まして、遅くも本年十一月末日迄には、物件引渡しをする事となつて居り、

又此の敷地も全部既に府へ返還致したのであります。以上、今日に至るまでの經過の概要を申上げた次第でありますが、これから藤塚君の司會により各位の懷舊談を伺いたいと思ひます。

木間瀬　懷德堂の現在の敷地は、私が府の內務部長をしておつた時に、無償使用の願出があつて、それが府參事會の問題になりまして、有料でなければいかんという意見が多かつたのですが、時の知事の大久保さんが非常に盡力され、私も及ばずながら骨折りまして、無償使用許可ということになつたのです。

井上　私は初め（大正五年開講當時）野口さんから聞きまして、聽講したいと思いましたが、なかなかたくさんの人で入れてもらえんということで、半年ほどしてから來ました。なるほどたくさん來ておりましたが、だんだんへつて來ました。あとはほん僅かになつてしまつたのです。講義は松山先生の「宋名臣言行錄」でした。初めは大講堂でやつておつたのですが、はいりきれんくらいでした。

岡野　その當時は實業家からも講演に出られましたなア。

音代　出られました。

岡野　鈴木馬左也さんなども出られました。當時は理事長は永田さんでした。

山本　私が寄せていただきましたのは大正六年の秋でした。初めて寄せてもらいました時は、狩野先生の「孟子概說」の講演で、孟母三遷のお話があつたことを記憶しております。これは土曜日の講演でした。講義の方は大正七年の三月に商業學校を出まして、家業を手傳うようになつてから、ずつと寄せていただくようになつたのです。

中川　特殊講義というのもありました。

山本　定日講義は西村先生が「孟子」の講義をしておられましたが、堂々たる體で演壇の前え出られて大きな聲でお讀みになりまして、論語を引證せられまして、そこえ世間話が加はりまして、講義がすむと、もう一ぺん大きな聲で讀まれまして、鄭重に頭を下げて終られたようなことでした。

私が一番記憶に殘つておりますのは、武內先生が民國から歸つて來られてから「諸子概說」がありました。それを樂みに缺かさず聽きに參りました。

それから聽講者の一番多かつたのが、穗積重遠先生の講演のあつた時でした。大講堂にはいりきれなかつたのです。

それから西村先生は、どれだけの人が聽講に來るかと

いうことが問題であつたので、空堂であつても講義をやるという意氣込であつたのが、あけて見ると案外多かつたので、びつくりされたということを承つております。私が參りました時分は、西村先生は人力車で來られて、講義がすんだら又人力車で歸られました。

これは太田さんから承つた話ですが、堂の創立に就ては當時の大久保知事さんが非常に盡力されたので、永田さんが太田さんに、もし大久保さんの御葬式があつたらどんなことがあつても懐德堂の聽講生が參らんといかんこれが私の遺言であると言はれたということを承つております。

井上　祭典には師團長の寺内さんも見えましたし、大阪砲兵工廠長の三輪時雄さんも見えました。三輪さんは聽講にも見えました。

音代　文科講義が始まつた時は、はいりきれんほどでした。

山本　内田銀藏先生が見えて「近世の日本」という講演があつて、それを吉田先生が速記されたものが單行本になりましたが、内田先生は、眼が悪かつたら讀めんというので、可なり大きな活字で印刷されてあります。

吉田先生からお聞きしたのですが、内田先生は、堂の事務所の二階にとまりこみで講演に來られたそうです。

中川　榊亮三郎先生は、私達お宅を訪問した時、懐德堂はどうもならん、聽講者は大きないびきで居眠つておるし困る、それにとまる所もないと言つて、大ぶん不平を言つて居られました。

音代　林（森太郎）先生が講義を始められたのは「古今集」で、それから「新古今集」や「萬葉集」などもありましたが、戀の歌はいかん（編者註、これは西村先生のお聲がかりらしい）というので、戀の歌は一切ぬきでした。

山本　それから近松の話もいかんという時もあつて、藤井乙男先生は、話をせよと言うなら、近松の話ならすると言はれたので、やめになりました。

井口　矢野仁一先生は東北辯で、御自身アハハハアと笑つたりしておられましたが、こつちはなんにもわからんのです。

山本　内藤先生は風呂敷にたくさん本を包んで持つて來られるのです。そして机いつぱいに本をならべて、その場所をあけては講演されましたが、結局時間の最後になると結論までいつておりました。

井口　内藤先生は名講演でしたね。私が三十五六の時でしたが、それから二十年ずつと聽かせていただきました。

講演會といつたらたいてい一回切りですが、こなたの講演は長く續きましてたいへん結構でした。一生忘れられません。

井上　澤瀉先生は隨分くわしいお話でした。又先生の脚の達者なことは格別です。

田頭　澤瀉先生は堂友會で二上山に登つた時、あの上に書いてある歌が違つておるというので、自身でなをしておられました。

音代　澤瀉先生は洋行の時、疊の上できちんと坐つてやらんと氣分が出んと、疊や羊羹を持つて行かれました。

山本　澤瀉先生には臨地講演に方々え連れて行つていたゞきました。

講義に見える先生方は、懷德堂の聽講者は一番行儀がよいと言つておられました。何年聽いても證書もらえるじやなし、それが氣分がよかつたのでしよう。

それから祭典は、舊門人の方は非常に樂みにして來ておられました。

井上　方違神社の神山さんは一番あとまで殘つておられました。神饌の魚や何か貰うのが樂みで來ておつたのです。それが七十か八十の老人です。

中川　孔子二千四百年祭というのをやりましたな。

山本　あの時よく練習させましたなア。

中川　釋典は毎年やりたいが、經費がないのでできんということでした。

岡野　いつか講堂で漢學大會がありましたね、石濱先生が幹事で。

それから高貴の方でおいでになつたのは久邇宮さんでしたね。

山本　東久邇宮さんも……。

岡野　東久邇宮さんは、此處で素讀をやつておるということを聞かれて、自分も小さい時やつたが、これは閉口したとおつしやつておられました。

鄭孝胥さんが來られましたね。

中川　王揖唐さんも……。

井口　ほかさんの講演はあたりさわりのないように內容のないものでしたが、こなたの講演は專門の先生方ばかりですから、平易にお說きになりましても、皆さんに理念のゆくように、內容の豐富なものでした。

岡野　堂友會の臨地講演は非常に權威があつたようですが……。

井口　中村直勝先生に方々え連れて行つていたゞきまして、まことに結構でした。

井上　天沼先生の石燈籠の話もよかつたです。あの講

演は幻燈を使用して、專門の講演と同じでした。私はよそえよばれて行つても、燈籠が一番に目につきます。向うは自慢でほめておるのですが、みんな悪いです、感心しません。（笑聲）あの講演で非常に參考になりました。

井口　おかげさまで、あれで方々の燈籠を味はうて見られるようになりました。

山本　大體大學の講義と程度をおとさずにという希望があつたのです。

千葉　懐德堂で聽いた話を受賣すると、皆感心して聽いております。

音代　松山先生は初めからしまいまで紋付でした。

井上　松山先生は漢學もやられ禪學もやられたから、死ぬ時は實に堂々たるものだつたそうです。太田君から聞きました。

中川　修養の程度が窺はれますな。大體松山先生は平生の講義もそうですけれども、殊に日曜日の朝の講義はしんみりと聞かせるような人格が出ておりました。あれは學問というのは、やはり人格ですな。

岡野　やはり論語を實踐躬行です。結局知命ということでしょう。

中川　自分の餘命が長くないということは覺悟があつたから、その時の構えは、ちやんとできておつたのですな。

立太子式の時でしたか、山本さんと二人で松山先生を芝居裏をつれて歩いたのです。紋付着ておつたら誰もようひつぱらんと言うて、松屋町をずつと南え行つて谷川という本屋をひやかして道頓堀え出で、法善寺裏え抜けて阪町え出て難波え出たのです。それで太田さんから、あんな時にあんなところえ連れて行くということがあるかと、えらい怒られました。

平田　私は大正八年の秋に初めて日曜朝講を聽いたのです。職業が銀行員ですから間の日は來られなかつたのです。日曜朝講にはそれから五年間ずつと來ました。日曜朝講は二人くらいの時もありました。

永原　私が懐德堂を知つたのはずつと後の事で聽講生としては極く新參者でした。確か昭和五年であつたと思ひます。大阪朝日新聞の廣告を見て財津先生の春秋左氏傳の講義を聽きに通ひました。所定の聽講手續を終へて毎週連續聽講しました。性來物覺えが悪いので一向其講義の内容を記憶してゐませんが、毎夜講義が終つて歸宅の道すがら、當日解說された語句等に興味を感じ、次週の聽講を樂しみにしたものでした。

處が一、二年後私は神戸へ移り住む樣になり、定日講義の方は、歸宅時刻が餘り遲くなる爲、受講を斷念し、

氣分のゆつくした土曜講演丈拜聽に出掛ける事にしました。其間時折病氣したり、商用の都合で度々休みましたが、戰災の直前迄ずつと續いて、十年餘神戸から通つたものでした。

聽講した土曜講演中特に興味深かつたものは、連續講義の、故天沼俊一博士、澤瀉久孝博士、中村直勝博士の日本建築と石燈籠、萬葉集、日本歷史に關する諸講義で時折臨地講演も催され、尾道、宮島、和歌山、大和、京都の各地へ泊り掛け或は日歸りで出掛け、各先生に親しく御指導賜つたことは、實に愉しいものでありました。

今日となつて殘念に思ふ事は、高田保馬博士や蜷川虎三博士等から直ぐにも役立つ經濟講演や、其他多くの先生方から有益な御講義を拜聽しながら、更に突込んだ勉強もせず、其日の感銘を今日迄活かし得なかつた事で、洵に慚愧に塊へませぬ。

尙私が懷德堂で心をひかれたものに、講義の前後打ちならされたあの古風な木司令（木板）の柔かい響音があります。之は禪寺等では別に珍しいものでもないでせうが、大阪の眞中で而も二百年の歷史を持つ同堂に幾代もの聽講生が同じ樣に耳にしたと云ふ連想が、何となく私には一つの刺戟ともなり、疲れた心を慰めるものでもありました。

さて私は懷德堂へ通つた御蔭で色々と知識を廣め、大に啓發された事は以上の通りでありますが、戰災で書庫を除き堂の建物全部が燒失しました事は眞に痛惜に堪へません。

幸ひに貴重な藏書は大阪大學に引繼がれ、春秋二回に催される講演會は益々盛大になつて、洵に喜ばしく存じますが、何分半歲に六日間丈と云ふ短期の事で、せめて之を一週一回の定時講演に迄進めて頂き度いと、望蜀の念に堪へぬ次第であります。

それにはどうしても大正五年同堂重建當時の如く、多くの有力者の理解と熱意が盛上り、講堂の再建運動が始まらねばならぬと思ひます。此度現存の敷地も府へ返還全く姿を消すに當り、理事者並に先輩諸氏の奮起を期待して已みません。同時に舊聽講生の御誘導を御願ひ致しますと共に、私達も能ふる限り御役に立ち度いと念願致してゐます。

山本　茶話會の時はいつも甘酒が出ましたが、甘酒は一番初め西村先生が持つて見えたということです。酒はいかん、そうかといつてお茶ではものたらんというので甘酒を持つて來られたそうです。（編者註、甘酒は茶話會や堂友會の集合にはいつも出たが、非常に美味なので大好評、遂に堂友會の名物となつた）

司會者　懷德堂が僅か三十五年で現在の場所を移轉しなければならんようになつたことは、なんと思つても殘念の至りです。又寺院を除いては唯一のあの支那風の珍しい木造の建物が、戰災とはいえ姿を消したことは、まことに惜むべきことです。而も道義の頽廢がます〳〵ひどくなりつゝある時に、懷德堂の宗旨とする德性の涵養は忽せにできないと思います。その點から言つても、懷德堂が一日も早く復興することを望んで已まないのです。どうか堂友會の皆さん、一層の御協力をお願いいたします。

まだ色々思い出話があろうと思いますが、豫定の時間も大分過ぎましたので、このへんで終ることにいたします。どうもありがとうございました。（終）